

当院医師がパラリンピックに医療ボランティアで参加!



整形外科 浅井 秀明医師

2021年8月24日から9月5日にかけて行われたTOKYO 2020パラリンピックに医療ボランティアとして参加いたしましたので報告させていただきます。従事したのは選手村診療所(ポリクリニック)で、4日間出務しました。対象は選手および関係者で、競技中のケガで受診される人もいれば、数年来の痛みを訴えられる方も多く、またパラスポーツ特有の義足や装具の調整を相談される方もたくさんいました。診療所全体の方針として、おもてなしの精神で日本の優れた医療を多くの方に知ってもらおうとスタッフ一同診療にあたり、幸いなことに多くの方から高評価をいただきました。

また、診療所で対応できない場合(手術等)、受け入れ先となる病院が事前に定められていたのですが、競技練習中に骨折をした選手の受け入れ先が見つからず、当院で治療を引き受けたという事例もありました。

コロナ禍の中、大会開催には賛否ありましたが、幸いにも無事に大会を終えることができ、大変貴重な経験をさせていただきました。

この経験を今後日々の診療に生かすことができればと考えております。最後に、大会期間中ご協力いただいたすべての方々に深く御礼申し上げます。



整形外科 諏訪 通久医師

私は日本パラスポーツ協会公認障がい者スポーツ医及び日本陸上競技連盟公認コーチとして以前からパラアスリートのサポートしていた経験から、東京2020大会で



も競技後半の9/3から9/5まで協力させていただきました。会場はメインのオリンピックスタジアムで、フィールド隣接の医務室に待機しておりました。ベッドは4床あり、救急セットはもちろん内服薬や点滴、外固定材、縫合セットなどが常備されており、初療としても幅広く対応可能でした。雨が多かったこともあり、低体温症や肉離れ、捻挫などの選手が多く受診されました。

基本は英語対応ですが、全く英語を話せない選手も多く、付き添いのスタッフや翻訳機を介してコミュニケーションをとりました。

医療行為だけではなく、アイシング用の氷や飲料水、テーピング希望の選手もたくさんいらっしゃいました。

あまり知られていないことですが、ドーピング対策のためにからペットボトルを渡す際にはこちらから選んで渡すのではなく、3本くらい用意して選手の意志で1本選んでもらうという決まりがあります。

■最後に

一生に一度の大変貴重な経験をさせていただき、周囲のスタッフのプロフェッショナルな働きに刺激を受け、アスリートの力に大きな感動をもらいました。ここで得た経験値と広がった視野を今後の診療に活かしていきたいと思っております。休暇をいただいたの参加となりましたが、快く送り出していただいた八潮中央総合病院の皆様にご感謝申し上げます。

